

エコステーション フライブルグ ドイツ

1998.2000年視察

このエコステーションは1986年に開催された庭園博覧会の記念施設として建設されたが、一年後に焼失し、その4年後に再建された。

Bund（自然環境保護連盟）が事業主体で全国に24万人の会員がいる。全ドイツに支部があるが、ボランティアの他、50人の職員がいる。

活動のテーマは

- ごみを出さない
- ゴミを燃やさない
- 遺伝子操作のある食品をつくらない
- 省エネルギー
- 核エネ反対

政治団体ではなく、教育的な観点で事業を進めている。

このエコステーションには太陽熱、太陽光発電が設置されている。ゼミナールを開いており、日曜もオープンしている。隣につくられたエコガーデンではコンポストや園芸の勉強を開いている。子供達に食物を育てることを教え、実践させる。生物的なゴミ処理、ビオトープの生態的存在、紙の再生利用などを教える。ここでは現在、職員が2名、自分の意志できている女性一人がいる他、名誉会員の人たちが応援してくれている。

将来に関する投資と知っているが、資金が必要。資金に関しては4つの柱があり

- ゼミナールの収入
- 市からの援助
- 州からの援助
- 寄付金（50から200マルク）

援助は年々縮まるばかりだ。

太陽光発電は1000kW/h年規模で、余った分は50ペニヒ/kWhで売電している。この売買価格は場所によって違い、普通は17ペニヒしか払ってくれない。また、2マルクで買ってくれるところもある。



まるで封土住宅のようにみえるエコステーションはドイツのエコ情報発信基地である。



ビオトープに面した太陽光発電パネル。

●中央に研修室があり、その天井は丸太の迫力ある木組み。これはインディアンが使う手法である。

研修室の周辺に小部屋が配置され、それらが熱的なクッションになって断熱効果を生んでいる。

●ビオトープは都市では重要である。

●自然材を使っている。

●断熱材は粘土、セルローズ、不要になったコルクなどである。

●台所

○レンジはガスを使用。電気レンジよりCO2放出量が少ないため。

○食洗機は電力使用のピークである8:30から12:00までは使わないように、それを示す表示をドアにつけている。その間は電力費も50ペニヒと高い(22時以降は12ペニヒ)

○省エネ電球を用いているが、この電球は一万戸の家庭に無料で配った。

○雨水は貯溜してトイレなどに使用している。下水料金は高いので、雨水利用は関心が高いが、更に雨水を利用する人の料金は下げられることになっている。

○ゴミはリサイクルできるものは緑のマークがついている。

●生活

○幼稚園の子供達に牛乳は瓶で買う、野菜は梱包なしで買うことを教える。

レンジはガスを使用。電気レンジよりCO2放出量が小さいため(発電効率も考慮して)。レンジファンがないのが日本的には驚き。

エコハウスの室内。丸太を重ねた屋根組みはインディアン構造。中央の部屋の周辺に小部屋を配置して熱的なクッションにしている。



庭に出るとビオトープがある。ゴミ箱に緑のマークが。



サンルームの床と壁は蓄熱性が高い

